

訳者あとがき (の, 元原稿の一部)

本書は、アダム・N・ジョインソン(Adam, N. Joinson)が執筆し、パルグレイヴ・マクミラン(Palgrave Macmillan)社から 2002 年に出版された、“Understanding the Psychology of Internet Behavior: Virtual Worlds, Real Lives”の翻訳である。インターネット上で、そこに参加する人間たちによって展開されているあらゆる現象について、心理学的な立場からの分析・検証を試みた意欲的な書である。

第 1 章では、インターネットの技術的な発展の歴史を概観しながら、このコンピュータに「媒介」されたコミュニケーションが持つ心理学的な意味について、伝統的なコミュニケーション形態(手紙、電信、電話など)との比較を交えながら検討する。第 2 章では、インターネット上のコミュニケーション行動に影響を及ぼす要因について、最新の関連論文を豊富に盛り込みながら網羅的に検討を加え、1)同調性 2)手がかりの少なさ 3)回線容量とコストによる制限 4)匿名性 5)送信者－受信者の関係に存在する排他性などを紹介する。第 3 章～第 7 章では、前章までで概括されたインターネットの特徴が、利用者の心理にもたらす影響について検討する。その際、影響の否定的な側面と肯定的な側面の両方をバランスよく取り上げ、影響の両側面について、個人内・個人間といった比較的小さなコミュニケーション単位から社会的現象に至るまで、幅広い関連研究がレビューされる。否定的な影響としては、インターネット中毒・フレーミング等の非社会的行動・ネット上に溢れるウソ、わいせつ情報の影響・抑うつなどが議論される。一方、肯定的な影響としては、オンライン上での自己開示やソーシャルサポート、そしてバーチャル社会に存在する弱い紐帯の効果などが議論される。第 8 章では、将来的な技術発展の見込みをふまえながら、今後インターネットが人間行動をどのように変えていくのかを展望する。特に具体例として、オンラインカウンセリング・教育への応用・電子商取引の現場で行なわれているさまざまな取り組みを紹介する。

インターネットの商業利用が開始され、その存在がごく身近なものとなってから経過した時間はごく短い。にもかかわらず、インターネットにおける人間行動に関する学術的研究は、多様なパースペクティブによるものが、非常に濃い密度で、(主として欧米が中心だが)世界中至るところで公開されている。しかし、訳者の考えるところ、残念ながら日本ではそれらの研究成果が十分に知られているとは言えない。そのことが日本におけるインターネットと人間行動に関する研究の歩みを遅くさせているとも考えられる。原書は、これまで蓄積された当該領域に関する研究を、技術的なパースペクティブによるものと心理学的なそれによるものの双方に関して、非常に丹念に収集・精読した上で構成されている。さらに、大変緻密で明解な論旨の展開がなされており、この分野の初学者にとっても、さらにこの領域を専門とする研究者にとっても、有用な内容となっている。訳者らは、原書を邦訳したことを、インターネットにおける人間行動に関心を持つあらゆる人々にとって大変意義深いものであると自負している。本書を通読することにより、インターネットにおける人間行動と、その根底にある心理メカニズムに関して、最新の社会心理学的な研究動向の統合的な理解と把握が可能となるだろう。

文責：三浦麻子